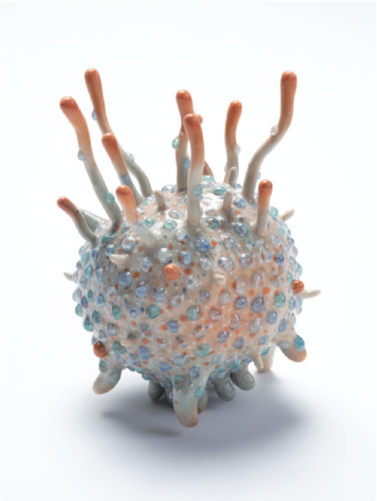
阿部　渚
ABE Nagisa

最果ての虚像

土、手びねり



最果ての虚像

　最も良いと思う姿を私は探している。それは曲線的であり、色彩豊かであり、斑点模様があり、そして中身がない空洞である。

　とりわけ姿の条件で1番重要視しているのは、曲線的である事だ。何故なら私は曲線を見ると生命を感じ、気分が高揚するからだ。また、同一の生物でも動きによって様々な曲線美の姿を見る事が出来、飽きることがない。次に中身が空洞である事が重要である。私は体の中に臓器がある事が気持ち悪いと感じる。それは自身の意思とは関係なく勝手に動き、とても不快だからだ。しかし現実に存在する曲線美をもった生物は、殆ど臓器を持ち合わせている。美しい姿であるのに、私と同じものが備わっている事が許せない。その為、中を空洞にしてしまえば不快な部分だけを取り除けると思った。またこれらの要素に加え、色彩や斑点、触手や透明感、そして美しさと気持ち悪さの間などの要素もある。私はこの全ての条件を集約した姿は、必ず存在していると思っている。そしてその姿を探索する為に制作を続けている。

　しかし考えの主軸は私である為、成長し考えや感性が変われば探している姿も変わっていく。理想の姿はその時々でしか生まれず、明確に想像出来ない。

　その為、私は変化や時間を超越した理想の姿に憧れ続けていく。